

第3回中野区ユニバーサルデザイン推進審議会 議事録

日時

令和5年3月16日（木） 午後7時から午後9時まで

場所

中野区役所 7階 第9・10会議室（オンライン併用）

出席委員（14名） ※オンライン参加者

徳田良英（会長）／山崎泰広（副会長）／市原恭代※／伊東海※／伊藤勝昭／
大野永美子／倉知和美／白岩裕子／新家愛／瀬田敏幸／高橋博行※／出竹美奈／
マッケンジー臣恵／矢島和行

事務局

企画部長 石井大輔
企画部ユニバーサルデザイン推進担当課長 堀越恵美子
企画部企画課平和・人権・男女共同参画係員 2名

徳田会長

みなさんこんばんは。定刻になりましたので、第3回中野区ユニバーサルデザイン推進審議会を開催します。本日も皆様から多くの意見をいただければと思いますので、どうぞよろしくお願いいたします。

本日の出席状況ですけれども、関東バス株式会社の小川様より欠席の連絡を受けています。15名の委員のうち過半数が出席していますので、中野区ユニバーサルデザイン推進審議会規則第4条第2項の規定に従いまして、有効に成立していることを確認しました。

続きまして、配布資料と発言方法の確認を事務局からお願いします。

堀越ユニバーサルデザイン推進担当課長

（配布資料及び発言方法の説明）

徳田会長

本日の議事に入る前に、前回審議会の概要及びユニバーサルデザインの考え方について、全員で認識を確認するため事務局から説明をお願いします。

堀越ユニバーサルデザイン推進担当課長

では最初に、前回審議会の概要についてご説明いたします。まず、計画改定の中で、考慮すべき視点を議論していただきました。中野駅周辺等のまちづくりの進展を踏まえた環境整備では、歩道や自転車専用道路の整備において動線上の障害の解消について、次にDX推進によるサービス向上では、デジタルの手段が苦手な人、対応できない人への対応方法について、次にハートの重要性を広めるところでは、手伝えることだけでなく、理解することなどの意見をいただきました。その後、現推進計画のハードの施策の方向に対する審議会の評価や意見について議論をしていただきました。今回は続きのソフト、ハートに進む予定です。

次に、ユニバーサルデザインの考え方についてです。中野区ユニバーサルデザイン推進計画冊子7ページ、もしくはスクリーンをご覧ください。まずユニバーサルデザインの考え方ですが、区ではユニバーサルデザインを「年齢、性別、個人の属性や考え方、行動の特性等にかかわらず、全ての人が利用しやすいようあらかじめ考慮して都市及び生活環境を設計すること」と定義しています。建物だけでなく、教育、情報、サービスなど、あらゆる分野に取り入れることができると考えています。次に計画書10ページではユニバーサルデザインの7原則を紹介しています。誰でも公平に使える「公平性」、利用者に応じた使い方ができる「柔軟性」、使い方が簡単ですぐに理解できる「単純性」、使い方を間違えても重大な結果につながらない「安全性」、必要な情報がすぐに理解できる「わかりやすさ」、無理な姿勢をとることなく、少ない力でも楽に使える「省体力」、利用者に応じたアクセスのしやすさと十分な空間が確保されている「空間性」です。

徳田会長

本日はこの話を踏まえて、ご意見をお願いします。ユニバーサルデザインの考え方について、簡単に私からも説明させていただきます。

ユニバーサルデザインは、「これがユニバーサルデザインである」とは言いにくく、コンセプトです。よく説明で使われるのが、シャンプーの側面にごつごつと突起がついているなどです。それらは目の不自由な人だけではなく、多くの人にとってわかりやすくしたものです。このようなものは、各会社それぞれで作っても意味をなさず、多くのシャンプー会社が同じように作っているから、突起がある方がシャンプーだと分かります。さらに、突起をつけて価格が大幅に上がってしまうと、製品に導入しにくくなってしまいます。お金をかけすぎないように知恵を出し合うことがポイントです。

それでは、議事、現推進計画に対する審議会の評価・点検及び意見、提案に入ります。本日はソフト、ハートの計八つの施策の方向について、各10分程度を目安に議論を進め、最後に意見をまとめようと考えています。

本日審議するソフトやハートの領域は、目に見えにくいこともあります。審議を活発にすることと、審議会の意見をまとめていくことに当たりまして、検討の視点例を事務局に

提示してもらいました。本審議会は計画を策定する際の考え方を答申することが役目ですので、日常生活で感じている不便さをどのような考え方で解消していくかのヒントや方向性をまとめた言葉にしていく必要があると考えています。日常に見える課題から、解決のための答申の考え方を意識してご発言いただくようお願いします。

それでは、「利用しやすくわかりやすい区のサービスづくり」から始めます。視点例として、わかりやすい手続や区民が便利だと感じる行政サービスが示されています。資料2では、3ページが関連部分です。では、議論を始める前に事務局から補足ありますでしょうか。

堀越ユニバーサルデザイン推進担当課長

資料2の3ページの「利用しやすくわかりやすい区のサービスづくり」で、右側に変更の視点を示しています。「全ての人々が円滑に利用できるサービス・事業の充実」として、区役所窓口の環境の点検・見直しを行っています。いつでも、どこにいてもオンラインで必要な手続ができるようスマートフォンを利用した個人認証や決済の導入を見据えた電子申請サービスの検討が変更の視点です。「災害時の迅速な情報提供と要支援者への配慮」で、災害情報の発信や必要な支援の対応を進めるとしています。その下に計画の策定に関して、概要版の作成や音声コードの導入を進めるとして現計画を進めています。

石井企画部長

区役所が新しくなります。現在、区立体育館の跡地で建て替えをしていて、来年の5月には引っ越しをします。新しい区役所では、できるだけ電子化を進めよう、あるいは区役所に来なくてもいろいろな書類がとれるようにしようと進めています。この取組みで便利になる部分もあるけれども、一方でデジタルに対応できない方への懸念もあります。これからの区の電子化でどういったことに配慮すればいいか、ユニバーサルデザインとしてどのような配慮が必要か、それぞれ感じていることを話していただけるとうれしいです。

徳田会長

議論をしやすいように範囲を狭めて、資料2の5の1「全ての人々が円滑に利用できるサービス・事業の充実」に関して、議論を進めましょう。今の説明も踏まえて、日頃感じている電子化でわかりやすい・わかりにくい、使いやすい・使いにくいなどありましたらお願いします。

新谷委員

以前転勤が多かったのですが、自治体によって電子申請のやり方やスマートフォンとパソコンのホームページの位置や使っている言葉が違うことで、戸惑いを感じたことがあります。引っ越しで中野区に来る方などが、他自治体での手続と同じように直感的に操作できるようになると良いと思います。

また、通いの場も他の自治体から引き続き活動ができたら良いと思います。デジタル技術、Z o o mなどを使って継続的に活動ができたり、他の自治体との連携という要素があったりすると良いと思いました。

矢島委員

町会活動の関係で区の助成申請手続きが多いのですが、4、5年前までは手書きで判子を押していましたが、最近多くがデジタルで申請できるので助かっています。ただ、申請書の一部はホームページからダウンロードできず、申請書を送ってもらうこともあり、全てホームページから入手できると便利だと思います。

また、円滑なサービス利用には、デジタル化に対応する職員も、今まで通り手書きに対応する職員も必要になり、過渡期なので、区の職員の対応は大変だろうと想像しています。

マッケンジー委員

仕事でいろいろな申請に関わっていたのですが、その申請が電子以外の申込みを基本的に受け付けないものでした。高齢の方や電子で申請できる環境にない方のために地域事務所のパソコンを予約して借りることはできても、大変で申請を諦めてしまう高齢の方が多くいたことが記憶にあります。電子化の波に乗れない方が困らないように、1人も取り残さないように手厚く行っていただきたいです。

徳田会長

今20代で若い方が高齢になる時には、機械に慣れている方が多くなると想像しますが、過渡期には使い慣れていない方も多くいるので、両方のサポートがあった方がいいと感じます。

山崎副会長

大学の時にコンピューター科学を専攻しており、多くのプログラムを作っていた時に、「フルプルーフ」という言葉がありました。日本語に直訳するとあまりよい言葉ではありませんが、「馬鹿でもできる」というような意味です。

どのような人が操作しても間違えないようにプログラムを作ることを指導されました。今でもこの教えを考えて行動しています。行政のホームページを見ていると、抜けているところがあって、専門家の目で作ると、専門家ではない一般の方のやることってわからないのです。ホームページに限らず、一般の方の目を入れて、政策を立案することが必要です。誰でもわかることが大切です。

最近、ホームページでチャットなど、いろいろなヘルプがありますが、ヘルプが少ないページもあります。いろいろなヘルプを用意しながら、高齢の方も操作できるようにしてほしいです。

また、ユニバーサルデザインで誰も取り残さないことが大事なので、できる限り、その他の方法でもできるようにすることが重要です。「全ての人」の中の知的障害の方等はどうかという課題もあります。保護者や支援者が代理で行うのかなど、必ず他の方法を考えた上でデジタル化を進めてほしいと思います。

また、前回の審議会でも話しましたが、高齢者のパソコンやスマートフォンの教室も多くあります。そこからすばらしい専門家になった高齢者もいるので、やってみないとわからないです。そういった教室も区が提供してデジタル化に向けて、高齢者やデジタルが苦手な方の支援を是非してほしいです。

白岩委員

日頃、高齢者を担当していることからの、分かりにくさをお伝えしたいと思います。

私ども介護サービス事業所連絡会が接する高齢者は、デジタルが苦手な方が多いので、関係者が見てわかるサポートのしやすさを考えてほしいです。ホームページのどこを見れば良いのか、スマートフォンを買ってもデータ通信契約が少なく、ホームページを見るなど、デジタルでの手続きには使えない状況なので、高齢者会館や区民活動センターなどでWi-Fiが使えるなどの支援が高齢者のデジタル手続きには必要です。できればそこで、資料2の5の1にもある、予約制のマンツーマンでの相談を受けられる体制があると進めやすいと思います。

これから一人暮らしで認知症の方も増えてくると、手続の案内さえ分からないことがあるので、関係者も案内を確認できたり、案内が高齢者に届いていることが分かったりすれば、周りのサポートもしやすくなると思います。

徳田会長

次に資料2、5の2の災害時の情報提供に関して議論を進めます。先日トルコの方で大きな地震がありました。東京にも、いつ大きな地震、あるいは災害があるか分かりません。ご意見がある方、お願いします。

マッケンジー委員

学校が災害時の避難所になるので、区の会議などに何度か参加しています。避難所になる学校の校長先生ともやりとりが密にあります。

その時に校長先生が憂慮していたのは、地域に要介護の方や1人では逃げられない方が多くいますが、どこに助けが必要な人がいるのか、情報が共有されないので、助けられないということでした。区に聞きましたが、個人情報をごくまで共有するべきかは大きな壁があって難しいとのことでした。

町会などまでは情報があるのかもしれませんが、町会役員でも高齢化が進んでいて、情報を持っている方たちを助ける必要も出てきます。災害時に動ける人が助けに行けるような情報の共有とユニバーサルデザインとして狭い道路などの見直しを進めていく必要があると思います。

矢島委員

町会に区から渡された要支援者の名簿は、町会役員のごく一部しか知らず、区施設の金庫に保管されているくらい重要なデータとして扱っています。個人情報保護審議会にも所属していて、今のお話と逆の流れになっています。

個人情報は守らなければなりません、名簿に名前を載せることすら嫌だという方もかなりたくさんいます。

そこが痛しかゆしで、有事の際にお手伝いをしたいので情報を共有してほしいという人もいてくれますが、個人の情報はできれば教えたくないという難しい状況があります。

大野委員

災害時の情報提供ですが、防災無線や非常放送が恐らく日本語だけです。多言語として、もう1、2か国語あってもいいのではないかと感じています。

瀬田委員

昨年区が行った総合防災訓練に国際交流協会が参加して、外国の方を含めた防災のシミュレーションを行いました。そこでも、やさしい日本語が注目されています。

やさしい日本語が知られるようになったきっかけは、阪神淡路大震災や東日本大震災の時に、避難所で言葉が通じず、情報が滞って亡くなられた外国籍の方などがおり、情報の壁が非常に大きかったという反省からです。避難時や避難所で外国の方にも同じように情報が伝わるように、防災を最優先にやさしい日本語やピクトグラム、サインを積極的に活用しながら考えています。

中野区も熱心に取り組んでおり、防災のハンドブックを多言語で用意しています。通常多言語というと、日本語、英語、中国語、ハンゲル語ですが、それにやさしい日本語を加えています。当協会のホームページもやさしい日本語や理解しやすい言語に変換しています。

以前ご紹介した多言語アプリには約32言語が入っていますが、中野区内にはそれを越える外国の方がいて、これを追求すると、120言語以上を用意することになります。AIを活用して、一人一人のニーズに合わせて情報をカスタマイズして届けるのが理想だと思います。これは外国の方に限らず、同じように情報のバリアがある障害がある方にも言えます。

伊東委員

I T化がどんどん進んでいくのは間違いないと思います。企業は厳しいので、生産性向上のためにI Tを活用していかなければいけないと思います。そうでないとグローバルに太刀打ちできないというレベルまで来てしまっています。

一方で、デジタルを使える人と使えない人がいます。使える人が増えるまでの期間をどうするかは重要な問題です。使える人が支援する、また、その周知をしていくことが大事だと感じていました。

高橋委員

福祉団体連合会で2週間前に防災講座を開催しました。今まで自助・公助・共助の3つが取り上げられていましたが、最近は「近所」が加わることもあるようです。特に障害がある当事者として、ふだんからお隣さんなど近所の方と親密でなくても、挨拶程度のつながりを持つことが大事だと話し合われました。また、何かあったときにつなぎ合えるような、ふだん使用するアプリで防災時に役立つようなI T上でのつながりを模索していくと良いのではないかと考えています。

昨今、個人情報保護の声が大きく、必要なときに必要な情報を出せないことがあるかもしれませんが、災害に関しては柔軟に考えるべきではないかと考えております。

山崎副会長

バリアフルな環境で人を助けるのは大変なので、元からバリアフリーな状態にすることが大事です。例えば、災害時に車いすの人が2階以上から脱出する装置が数多くあります。また、階段から下ろすことのできる車いすもあります。中野区の新庁舎ではそういうものの整備が必要です。また、そういうものを整備する助成金を設計してほしいです。

「逃げバリ」という災害時のバリアフリーが数年前から語られています。本も出ているので、参考にしていただきたいと思います。

徳田会長

続きまして、「地域に気軽に楽しく学べる場づくり」に移ります。検討の視点例として、デジタル技術に合うこと、合わないこと、I C T活用が進む中での場づくりに必要なことが示されています。まず、区で感じていることがあれば、お願いします。

石井企画部長

まず「学びの場」に行けるのかというハードの話はありますが、ここではソフト面である学びの内容や文化の享受においてユニバーサルデザインの視点から制約になっていることとお話いただければと思っています。

白岩委員

コロナ禍でも元気アップ体操広場などを開催していたことが高齢者にとっては良かったと思います。ただ、密にならないように、元の1つのクラスを2つに分けたので、参加できる場が半分になってしまいました。

また、これまで借りていた区の施設が工事で使えず、他に場所を確保できないとお困りの声も聞きます。この計画の取組み以外の実態ももっと把握して、高齢者が増えているので居場所を増やす取組みも検討していただきたいと思います。

伊藤委員

住民主体で、高齢者が要介護にならないための地域の居場所づくりのイベントを毎週1回行っています。1回の参加者が50人くらいですが、イベントでお茶飲み会を行うと、最近では地域を越えてくる人も多くいて、場が求められていると感じます。区の助成金でこのような場をつくることができますが、区の要求内容は厳しく、申請を尻込みすることもあるようです。みなさんが地域活動しやすいように、もう少し簡便にしてもらえると良いと思います。

出竹委員

公的な施設で畳が残っている場所は、趣は良いのですが、高齢者や障害のある方が使いにくく、改善していただきたいです。

また、地域活動は近所に場がなかったり、工事などで使えなくなったりすると、行ける場がなくなるとよく聞きます。空き家など、何かに活用できる地域のスペースがあると、公的な施設に限らず、身近なところで地域活動がしやすくなるかと思います。

徳田会長

場所の問題に合わせて情報の問題もあります。多角的に問題が波及しますね。

マッケンジー委員

鷺宮スポーツコミュニティプラザの運営委員会に出席しています。コミュニティプラザで障害のある方のイベントや教室が行われているのですが、参加するには開催場所に行くまでの介助が必要です。ボランティアを募集しても、昼間だと無償のボランティアは、なり手が少ないです。コロナウイルス感染症も落ち着いてきて、利用者も戻ってきて良い状態ですが、せっかく企画しても介助者がいないという課題があります。有償ボランティアなら、なり手が増えるのではと想像するとともに、有償の責任感も生まれるのではないかと感じています。

徳田会長

次に、「地域における利用しやすいサービス・商品づくり」に議事を進めます。区民、事業者がユニバーサルデザインを実現するために必要な知識や行政支援の視点があります。資料2の4ページが関連する部分です。

市原委員

使い慣れていない申請方法は使いにくいです。これからの高齢者はデジタルに全く触れたことがない方は珍しくて、ファクスや以前のパソコンなど一世代前のデジタルに触れている方が多いです。昔のものなら使えても、新しいものは操作が簡単になったはずなのに、昔の癖でうまく使えないことがあります。

授業で学生に使いやすいようにデザインをさせますが、実際に使ってもらおうと「前の方がよかった」となることが多くあります。使いやすく簡単に直感的に使えるようにしたはずなのに、使いにくいものの方が良いと言われる場合があるので、いろいろな調査が必要です。

山崎副会長

対象者を知らないことが一番大きい課題だと思います。例えば、官公庁の審議会でも「障害者対策」や「車いす対策」といいます。しかし、障害者には様々なタイプがいるし、車いすだって様々な人がいてニーズが異なります。それを知らないで、大ざっぱに物を作ると失敗します。

区が率先して、指導ができる障害者と企業やお店の人をつなげるような懇話会などの活動が必要です。大企業でも誰が使うか分からない「障害者向けの車」を作ってしまうことがあります。病院にあるような車いすを前提にバスの中に固定装置を作ったら、新しいタイプの車いすだと使えないということがありました。当事者のことを知るための機会を是非提供してあげてほしいと思います。

徳田会長

チャンプーの例のように、実現するためには企業間の横の連携、情報の共有ができる機会も必要なかと思います。

次に、「わかりやすい情報を簡単に得られる環境づくり」に進みます。デジタル時代に合わせた情報提供の在り方や、誰もが使いやすいホームページ、わかりやすく知るために必要なことが検討例です。

伊藤委員

地域で高齢者を集めてスマートフォンの操作方法を教える「スマホカフェ」を始めました。来る人の話を聞くと、電話とメール、カメラの機能があれば良くて、それなら携帯電話でもいいのでは、と思いますが、みなさんスマートフォンを買わされているようです。

しかし、スワイプやタップの説明から始めないと使えず、販売会社のスマートフォン教室に行くけれども、すぐに忘れてしまう人たちがたくさんいます。私たちの会には、毎回同じ人が来ます。そして、毎回同じことを聞きます。繰り返し学ぶことが必要です。高齢者を情報の波から救う施策も必要だと感じます。

先ほどの個人情報に関する地域名簿の問題ですが、中野区にはアウトリーチチームという良い制度があります。そういうものをうまく利用して、町会の人たちと一緒に地域の見守り活動をしないと、助け合いの課題は解決できないのではと思います。昔の五人組ではないですが、地域の活動が必要だと思います。

徳田会長

高齢者が学び合える環境はとても大事だと思います。

市原委員

スマートフォンを扱い慣れている今の大学生がパソコンを使えないこともあります。システムが新しくなると、若者であっても情報弱者は結構な割合で出てくるので、統一性が大切です。例えば、パソコンとスマートフォンの操作方法が異なるなどです。問合せに対応するのも大変ですので、統一インターフェースを作ることが大切だと思います。

徳田会長

それは正にユニバーサルデザインですね。私の大学にもスマートフォンは使えるけれども、パソコンが使えないという新生が入ってきて、最初レポートを書けなくて困っている学生もいます。

次は、ハートの領域の議題に移ります。「違いを超えて尊重しあう心を育む教育環境づくり」です。教育の現場に必要なかつ実現可能で家庭でもフォローアップできることが、視点としては大事だと思います。資料2の5、6ページが関連部分です。

マッケンジー委員

学校が特別支援教育を一生懸命に取り組んでいますが、特別支援学級に子どもを通わせていない家庭の保護者に情報が伝わらないという課題があります。一概に発信側の問題ではなく、学校がどれだけ発信しても気持ちがいなければ伝わらないので、家庭の無関心も原因にあると思います。アンケートの実施で初めて自分の学校を知ることが多くある

ので、特別支援教育に関わらず、知ってもらい、理解してもらうことをうまく提供して、一緒に学校で成長していくことが大事だと思います。

伊藤委員

学校の周りにもバリアがたくさんあるので、各学校で通学路のバリアフリーをやってもらえると良いと思っています。私は、全ての区内小学校の通学路バリアフリーマップを作りたいと考えています。その小学校に通っている生徒が地域を知るきっかけになり、バリアを知ると重要な気づきがあると思います。2、3か所の小学校では既に実施しました。ユニバーサルデザインに基づいたトイレを含む、幾つかのコースを車いすで回り、身近なインフラを実体験で学ぶと子どもたちにとって良いと思います。

山崎副会長

この教育の施策の方向でも、障害のある人の中にも違いがあると教えることが大事だと思います。重い車いすを体験させると、子どもたちは「大変」、「重い」、「つらい」という感想です。私の場合は、小さい車いすや大きい車いす、スポーツ用の車いすを用意して、いろいろ乗ってもらいます。そうすると、「こんなに違う車いすがあるのか」、「自分のおじいちゃんは、もっとこういう車いすがいいのかな」という話にもなります。視覚障害者はこういう人、知的障害者はこういう人、のような学校教育だと思考が固まってしまいます。いろいろな人がいていろいろな障害のレベルがあると教えていく次の段階にきていると思います。

大野委員

バリアフリーというと、多くの方が車いすの体験やアイマスクを使った視覚障害の方の体験を思い浮かべると思います。ただ、実際は目が不自由な方はいろいろなことができるのだけれども、アイマスクの体験だけで「こんなに大変なのか」と言われて違和感があったと聞きました。

逆にバリアフリーとしては話題に出にくいのですが、小さい子どもを連れた荷物の多いお母さんが困っているという事象があります。トイレに行くと、子どもを座らせる場所があっても大きな荷物を置く場所がないなど、抜け落ちている視点も多くあるのではないかと思います。そういう視点をピックアップする場があるといいのではないかと思います。

徳田会長

バリアフリーやユニバーサルデザインは小、中学校の家庭科の教科書などに載っているようです。以前は国語の教科書に載っていて、その内容を踏まえて総合的学習という授業をしていたのですが、国語の教科書からはユニバーサルデザインの記述が削減されたようです。さらに、総合的学習の内容は時代の流れに左右され、今はSDGsに話が移ったことでユニバーサルデザインに関する授業時間が減った、と他の区で聞いたことがあ

ります。学校でできない部分は、地域で育んでいくという視点も必要だと思います。学校の先生は時間が限られていて全て教えることが難しいので、詳しい方の力を借りるやり方もあると思います。

次に、「ユニバーサルデザイン推進の担い手づくり」に議題を進めます。ユニバーサルデザインに必要な職員や区民の意識が検討の視点例として示されています。資料2の6ページが関連資料です。

山崎副会長

いくつかの県や市で、ユニバーサルデザイン担当の部署を作るお手伝いをしました。担当者が異動するとゼロからやり直しになってしまうので、ユニバーサルデザイン担当を各部署に1人配置しました。ユニバーサルデザインは全てに関連するため、どこの部署でも必要です。中野区でもそういったことを進めるといいと思います。

新家委員

昨年、母が定年退職をしたのですが、自分がやれることとして要約筆記を勉強して、生き生きと活動しています。支えられる人と支える人の関係だけではなく、高齢者の中にも担えることがあるので、スキルなどを身に付けてもらうのもいいかと感じました。

また、区職員の理解促進研修がありますが、理解だけでなく実感することが大切だと思います。私自身、会社で研修を受ける機会がありますが、繰り返し言われたり、勉強したり、オンライン研修を受けたりする中で、教えが自分の中に残って実感できることもあるので、繰り返しが大事だと感じました。

白岩委員

区職員の理解促進の実績に50名の研修の記載がありますが、50名は区職員の中で少ない割合だと感じました。コロナ禍ですので動画視聴の研修が多かったと思いますが、仕事の合間を使えば、かなりの職員数が見られると思います。また、「見ました」、「やりました」で終わりではなく、初級、中級、上級と、段階を経た研修を行って、状況を確認できると良いと思いました。

伊藤委員

中野区では区民に対してユニバーサルデザインサポーター養成講座を行っています。この内容は動画視聴です。講座の内容である困っている人に声をかける場面に出会うことは意外とないかと思います。

他区の入庁2年目の職員研修に4年ぐらい参加しています。障害のある方に来てもらって、講座をして、実際に外に出て、車いすでいろいろなコースを回る全職員が参加する研修を行っています。新しい発見があって役に立っているようなので、職員のユニバーサ

ルデザインに対する意識向上のために実地の研修をすると業務にも役立つのではないかと思います。

徳田会長

続いて、「ユニバーサルデザインの考え方を広げるしくみづくり」に進みます。区民、事業者が関心を寄せるユニバーサルデザインの視点や、ユニバーサルデザインを意識できるきっかけが検討の視点例として示されています。資料2の6ページから7ページが関連部分です。

大野委員

使う時に「なぜできたか」、「どこがユニバーサルデザインなのか」の説明があると、みなさんがユニバーサルデザインを意識できるきっかけになるとと思います。例えば、中野区ユニバーサルデザイン推進計画でユニバーサルフォントを使っていますが、意識して見えていない人も多くいるので、「全ての人にわかりやすく作成した印刷物です」と書く。その説明を見ると、生活の中で実感を持つと思います。

マッケンジー委員

ユニバーサルデザインを広めていくに当たり、区役所や中野駅周辺でイベントが開催されることが多いので、いろいろな場所で開催してほしいと思います。

伊藤委員

地域でユニバーサルデザインを広めるといって大変に感じるかもしれませんが、例えば、町会を通じた会合で、施設のピクトグラム調査を行うと身近に感じられます。一般のエレベーターと個別対応エレベーターがあります。エレベーターの機能をピクトグラムなどで表示しているところもある一方で、案内にも表示されていないところもあります。10分あれば施設のピクトグラムを調べられます。ユニバーサルデザインを区民が知るきっかけになります。

倉知委員

資料2の主な取組の啓発小冊子のことは、この審議会で初めて知りました。ふだん意識せずに生活していると、知らないことが多かったと思いました。意識しなくても目につくように、例えば、小学校にわかりやすい子ども向けの冊子を置くなど、いろいろなところに置いてほしいと思います。

また、イベントは区役所や中野駅周辺だけでなく、地域センターや小学校でもやってほしいです。いろいろな方を呼んで講演会を開催するのもいいのではないかと思います。

高橋委員

ユニバーサルデザインを推進していることに無関心の区民が多いように感じるので、多くの人が利用するコンビニエンスストアに協力してもらって、店内にポスターを貼る、チラシを置くなどすると、老若男女問わず目につくように思います。

伊東委員

どんな取組みが効果的かはやってみないと分からないところもあるので、いろいろな取組みを組み合わせると、意識が広がって効果的だと思います。

徳田会長

続いて、「個性や多様性を大切にする意識づくり」ということで、ダイバーシティに関する議題です。資料2の7ページに関連部分があります。暮らしの中で意識しなくてはならないことや意識を高めるために必要なことが視点です。

瀬田委員

現計画内の「国際理解・国際化推進」は古いカテゴリーになりつつあります。今は「多文化共生社会」が多いです。よくわかった人同士がつながることも大事ですが、言葉や人種の壁を超えて、中野区で共に生きる身近な存在として生活者視点を持つことが何よりも大事です。

中野区には外国籍、二世の方あるいは永住の方が増えてきており、2万人を超えようとしています。日本人は、日本語を話し、髪が黒いという人が多いです。そこから良い意味で脱却する時代を迎えているのではないのでしょうか。そのためには、現計画にもある、個性や多様性を尊重する社会が求められています。少数の方へ目が向かなかったところから、一人一人の違いに着目して、各団体で、あるいは地域の中でどう結びつけるかを考え、一緒に暮らす時代になってきています。

中野区も多文化共生推進基本方針等に取り組んでいて、私も連携協力をしています。区を挙げて、あるいは区民との協働で、次なる社会に向けて走り始めていると感じます。その中の一つのツールとして、やさしい日本語が注目されています。翻訳ツールやAIなど様々な手段を活用しながら進めていくことが大切だと感じています。

白岩委員

個性や多様性を大切にする意識づくりは子どもの教育、学校教育、地域の教育に反映して見えてくるといいと思いました。

マッケンジー委員

パートナーが外国人で生活の中で感じることは、大人が他国の人を怖がらないことが大切だと思います。日本は閉鎖的な部分が多いです。ここ10年でかなり良くなっていると肌で感じますが、まだまだです。

海外の人が日本語で「道を教えてください」と言っても断っている場面を見かけたり、聞いたりします。リスペクトの気持ちを持って向き合えば、他国の人と同じように返してくれますし、大人が怖がると子どももその様子を見て怖いと思い込んでしまいます。

学校の教育では、日本のことをきちんと教えることが大切です。日本を理解することで、「では他の国はどんなのだろう」と興味を持ち始めると思います。海外の方と交流を持つ時に、自国のことがわからないとお話にならないです。まずは日本人として日本のことをきちんと知ることも教育として大事ですし、その積み重ねの教育が基になって、日本人が海外の方とうまくコミュニケーションをとれるようになると思います。

伊藤委員

今年度中野区がダイバーシティフェスタというイベントを開催しました。多様な方が集まってブースを開き、多くの人に理解を深めてもらうことができました。たくさんの方に状況を知ってもらうため、来年度の開催も中野区にお願いしたいです。

山崎副会長

先ほど話に出た、違いを理解することが大切だと思います。イギリスで障害者差別解消法が始まった時に、「DETトレーニング」というものが始まりました。「Disability Equality Training」の略で、障害の方を理解するトレーニングです。その中にある考え方が障害の「医学モデル」と「社会モデル」です。

昔、障害者は医学的に障害があるから悪いと言われていました。しかし、障害は、社会の仕組みやインフラが整備されていないから創り出されたという「社会モデル」に変わってきて、パラリンピックに向けたまちづくりでも、この考え方を心のバリアフリーに取り入れました。

DETトレーニングが日本に入って来て、日本で最初に始めた方たちのところへ受けに行きましたが、ここ数年で見た研修の中で最も素晴らしいトレーニングだと思いました。「ファシリテーター」というトレーニングを受けた障害の方がいて、その人たちが中心になってロールプレイングを行ったり、ビデオを見たりして学びます。

研修の最初に「障害って何ですか」と問いかけると、「大変」、「かわいそう」と言っているのが、最後に聞くと「私たちが何かをしなければいけないのだ」という方向に変わっていきます。DETトレーニングのファシリテーターは障害のある人がほとんどで、目黒区など幾つかの区にはもういます。中野区にいらっしゃるかわかりませんが、中野区でも

ファシリテーターをつくってDETトレーニングを提供するといいと思います。違いについても理解するので、外国の方や男女のことにもつながると思います。

徳田会長

マッケンジー委員の「怖がらないで」という話が胸に響きました。知らないと怖い気持ちを感じて警戒してしまうので、交流の機会があると、打ち解ける場になります。交流するいろいろな場面や環境があるといいだろうと思いました。

最後に、市原委員と山崎副会長に本日を統括してご発言をお願いします。

市原委員

ユニバーサルデザインはいろいろな人を対象にしているので難しいですが、複雑にしないことに合わせて、困っている声を聞いて、一人一人に対応することも大切です。先回りして想像で作ると、うまくいかなかったときに邪魔になってしまいます。予算も無駄になります。パンフレットの作成よりも、対応方法を記録して、それを広く周知した方が効果的だと思います。

徳田会長

当事者の方に参加してもらわずに勝手にやってしまうとうまくいかないの、当事者の方も一緒に参加する視点が大事ということですね。「いろいろな人にとって良いものにする」ことは難しいからこそ、みんなで相談していくことが大切だと思いました。

山崎副会長

本日のご意見から、ユニバーサルデザインを学ぶ場が少ないことを感じました。障害のある方や外国の方などと触れ合う機会が少ないのかと思います。そのような機会を増やしていくことを入れてほしいです。

先ほどお話しした、障害の社会モデルは他のマイノリティーの方に対しても使える考え方だと思います。オリンピック・パラリンピックの行動計画にも入れた考え方でもあるので、その考え方を取り入れると良いと思いました。

徳田会長

本日もたくさんご意見をいただきまして、ありがとうございます。今回の議論を踏まえて、次回以降は答申に向けて、話をある方向にきちんとベクトルが向くように、議論を進めていければと思っています。事務局から事務連絡をお願いします。

堀越ユニバーサルデザイン推進課長

次回の第4回審議会は、5月11日木曜日の夜を予定しています。

議事録は前回同様、委員のみなさまに確認をいただいた上で作成しますので、ご協力をお願いします。

徳田会長

以上をもちまして、第3回中野区ユニバーサルデザイン推進審議会を閉会します。次回もよろしくをお願いします。

(午後8時50分閉会)